

全国山名氏一族会について（概略・ご参考）

全国山名氏一族会（以下：山名会）は、中世室町時代に西国を中心に12ヶ国を領した山名氏及び、その家臣団の末裔を中心とした親睦団体で、分国各地の山名氏史跡を巡り、各地山名氏代々の歴史を学び遺徳を顕彰し会員相互の懇親を深めることを目的に、昭和61年に設立されました。

以来、下記のような事業を中心として活動しております。

主な事業

年次総会

毎年、山名氏所縁の地を選んで、年次総会と各地山名氏の歴史探訪を主題とした総会行事を開催して居ます。

回	年	開催地	主要行事・訪問先	参加者
1	S 6 1	但馬村岡	一族会結成総会、円通寺・総持寺・竹田城	48名
2	S 6 2	京都市内	東林院禪高公御廟・眞乗院宗全公御廟参拝	63名
3	S 6 3	伯耆倉吉	時氏公御廟、山名寺、田内城、打吹城	59名
4	H 1	但馬村岡	壺溪御廟、竹田城山名赤松合同慰霊祭	60名
5	H 2	但馬竹田	山名赤松両軍慰霊塔落成式、多田神社	52名
6	H 3	但馬村岡	山名蔵開館式典列席、楞嚴寺、鳥取城	100名
7	H 4	群馬高崎	山名八幡宮、山名城址、新田氏史跡等	70名
8	H 5	堺和歌山	南宗寺、松林寺、興国寺	55名
9	H 6	備後福山	神辺城址、天寧寺、西国寺、千光寺	50名
10	H 7	京都市内	六孫王神社、長福寺、東林院、眞乗院、相国寺	53名
11	H 8	作州津山	津山城、岩屋城、多聞寺、院庄館	43名
12	H 9	鎌倉伊豆	長谷寺、大仏、鶴岡八幡宮、修禅寺	25名
13	H 1 0	出石豊岡	山名氏シンポジウム、此隅山城、総持寺	40名
14	H 1 1	京都市内	東林院禪高公廟、長福寺宗全公灰塔	34名
15	H 1 2	群馬高崎	山名八幡宮、反町館、永福寺、生品神社、大光院	35名
16	H 1 3	京都周辺	眞乗院、妙心寺、京都周辺関係史跡	37名
17	H 1 4	倉吉鳥取	山名（三明）寺、鳥取市内史跡見学	29名
18	H 1 5	但馬村岡	法雲寺・円通寺・出石・竹田城	28名
活 動 停 滞 期 H 1 6 ～ H 2 3 の 約 7 年 間				
19	H 2 4	京都市内	東林院、眞乗院、等持院	30名
20	H 2 5	出石竹田	宗鏡寺・出石神社・竹田城	50名(予定)

出版物

山名会会員の研究成果発表の場として、冊子等の発行を行っています。

- * 山名家譜（宮田靖國編）
- * 山名氏八百年（山名氏一族会著）
- * 全国山名氏一族会報（①～④号）
- * 山名赤松研究ノート（①～⑨号）

顕彰事業（特別事業）

通例の事業とは別に、特別事業として山名氏関係の事跡や関係寺社の整備事業への協力も行ってきました。

- * 山名赤松供養塔建立（竹田城）
- * 神馬像奉納（山名八幡宮）
- * 眞乗院本堂再建協力（南禅寺）
- * 山名氏史料館「山名蔵」建設協力（法雲寺）、その他清和源氏関係寺社への事業協力。

活動の停滞期

山名会も発足十年を過ぎた辺りから、事業の定例化・会員の高齢化により会員数が減少を続け、その打開策として事務局の東京移転を進めたのですが、折り悪く平成16年頃から執行部主要役員の問題が重なり、会執行部の若返りが出来ぬまま5年以上活動停滞期を過ごして居りました。

この状況を打開するため、関西在住の旧役員が中心となり会員各位に呼びかけ、心機一転の再出発を図ったのが、昨年平成24年の総会からとなります。

このたびは20回の節目にも当たり山名の本拠地である但馬を会場とさせて頂きました。

山名氏について(概略)

山名氏の起り

山名氏は、清和源氏の名流・新田義重（源義家の孫）の三男・義範が上州高崎の山名郷を分け与えられたことから、土地の名を取って「山名氏」と名乗ったことから始まる。年代は不詳であるが、氏神山名八幡宮の創建が平安末（1175年頃）であるから、それ以前から山名氏を名乗っていたことは確実と言える。

鎌倉山名氏

初代・山名義範は源頼朝（源義家の曾孫の子）の鎌倉挙兵の際、いち早く参陣し源平の戦いで数々の武功を挙げ、「平家追討源氏六人」や鎌倉幕府内で源姓を名乗ることが許された「御門葉」に名を連ね、幕府においては代々引付衆に就き、北條氏が数多くの源氏を排除する中、一族滅亡に追い込まれること無く幕府内の御家人として続いた。

室町山名氏

八代・山名時氏の頃、北條執権の専制に新田義貞・足利尊氏が反旗をひるがえす。新田の分家である山名だが、時氏からみて尊氏は従兄弟の子で当たるため、足利側に付き室町時代を迎える。

室町時代には三管四職の四職家の一つとなり、以降西国を中心に勢力を拡大させていく。時氏の代は西国5カ国の守護職となり、次代の師氏・時義の代で7カ国、氏清の代で12カ国半（一般には11カ国と言われる）の大太守となり、「六分一殿」と呼ばれる。

明徳の乱の後、山名の守護国は3カ国に減るが、持豊（宗全）の代には10カ国まで回復する。尚、西国を中心に各地に山名姓が広まっているのは、守護国が広範囲に渡っていた為、各地に一族の者を派遣し統治していた名残と思える。

戦国時代

宗全の代に起きたのが「応仁の乱」である。乱は京を中心に11年に及ぶ歳月続き、京の町は大いに荒廃し、乱に参加した守護大名は長く続く戦により、その勢力が疲弊し、下克上の世へと繋がっていく。

戦国時代には、毛利・尼子等の新興勢力の台頭により山名も支配下の国は但馬・因幡の2カ国まで減り、やがて豊臣軍の但馬・因幡攻めで豊臣の軍門に下ることとなる。

江戸時代

村岡山名

豊臣政権下では、因幡守護職であった山名豊国は秀吉の「お伽衆」として仕え、関ヶ原では東軍に付き、徳川幕府においても「お伽衆」として仕え、七美郡6700石の領地を得る。

江戸時代は但馬山名氏に代わり山名宗家として、大名待遇の旗本として存続し、その後、明治2年の石高見直しで1万1千石の大名と立藩、その後、明治維新を迎える。

最後の藩主であった義路は明治4年、廃藩置県により村岡藩主から村岡県知事に就任。同年、村岡県は豊岡県に合併後、東京に出て陸軍軍人。明治17年の華族令により男爵授爵、貴族院議員を歴任し、子孫は現在に至る。村岡山名で15代、山名氏歴代で32代。

但馬山名

出石の但馬守護職・祐豊の子、堯熙その子、堯政は豊臣政権下では秀吉の家臣として仕え、関ヶ原では西軍に付き、大阪夏の陣で堯政が没する。豊国は堯政の子、恒豊を養子に迎えることを徳川幕府に願い出るが許されず、代わりに祐豊の旧臣であり徳川幕臣となっていた清水正親の養子となり、後に山名に復姓する。出石山名は江戸時代は旗本として存続し、明治以降も現在まで営々と続いている。

以上、山名の流れの概略である。山名氏というのは数多くの戦国のヒーロー武将に比べて地味な存在ではあるが、鎌倉～江戸と各幕府に存続し続けた武家は唯一「山名氏」のみ。その意味では『武家政治の始まりから終焉までを見届けた唯一の武家』と言える。